

障害のある子どもたちとの 創造的体験の場づくりと 施設間交流の記録

アーティスト・ワークショップの実践から

2023
|
2024

放課後等
デイサービス

広尾てくてく／友愛こどもクラブとこことこ

小学校特別支援学級

業平小学校／外手小学校／赤羽小学校
浮間小学校／王子第一小学校／滝野川小学校

障害児 入所施設

宮代学園
友愛学園児童部

発行日
2025年3月15日

発行者
特定非営利活動法人
芸術家と子どもたち

写真
金子愛帆
P.5 広尾てくてく / P.7 外手小、交流WS / P.9を除く

編集・デザイン
緒方彩乃
※無断転載・複製を禁ず。

この事業は、公益財団法人東京都福祉保健財団
「子供が輝く東京・応援事業」の
助成を受けて、2023～2024年度に
実施、本誌を作成しました。

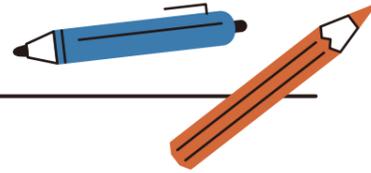


NPO法人芸術家と子どもたち 事務局
〒170-0011
東京都豊島区池袋本町4-36-1 旧文成小学校2階
TEL: 03-5906-5705 FAX: 03-5906-5706
mail: mail@children-art.net

はじめに

芸術家と子どもたちでは、2018～2020年度に「子供が輝く東京・応援事業」の助成を受けて、複数の児童養護施設等での継続ワークショップと地域交流事業を実施しました。そして2023～2024年度の助成事業では、前回得たノウハウを活かし、障害児入所施設、放課後等デイサービス、小学校特別支援学級でのアーティスト・ワークショップと交流事業を通して、障害のある子どもたちの創造的体験や交流の場をつくり、子どもたちが健やかに成長していく環境づくりを行いたいと考えました。

この冊子では、ワークショップのレポートや交流会議の記録を通して事業を振り返り、これからの課題や可能性について考えていきます。



事業の背景

障害のある子どもたちのうち、障害児通所支援の利用者数や特別支援教育を受ける児童生徒数は年々増加しています。障害児入所施設の利用者数は2022年調査で1.37万人と、2012年調査の1.5万人から減少していますが、放課後等デイサービスの利用者数は2022年度30.6万人で、2012年度の5.7倍に増加しています。また、特別支援教育を受ける児童生徒数は、特別支援学校(幼小中高)で14.9万人(2012年度の1.1倍/全児童生徒の0.9%(小中))、特別支援学級(小中)で35.3万人(同2.1倍/全児童生徒の3.7%)となっています*。

障害児者への支援が、入所等から地域生活の中で包括的に行われることで、地域で共生社会を実現することが期待されていることが伺えます。しかし、それぞれの施設・学校において、子どもたちの障害の程度や種類は異なりますが、多くの場合、既存の施設職員や教員の数に余裕はなく、体験の機会が少なくなりがちで、地域の中で他施設や他校と交流する機会は多くはありません。また、障害のある子どもたちは、障害児入所施設で暮らしながら特別支援学校へ通学したり、家から学校の特別支援学級へ行った後、放課後等デイサービスへ通ったりと、一人の障害のある子どもが複数の施設・学校をまたいで生活しているケースが珍しくありません。けれども、種別の違うそれぞれの施設や学校は相互の交流がほとんどないため、他の施設・学校で行われている支援内容を共有する機会が少なく、一人の子どもに対して分断された支援が行われている状況であるといえます。

*こども家庭庁支援局障害児支援課 こども家庭審議会障害児支援部会 第6回(2024.7.10)資料2『障害児支援施策について』参照

事業のねらい

このような問題意識から、今回の事業では、以下の3つの柱に沿って事業を計画しました。



子どもたちの心理的支援を目的としたアーティスト・ワークショップの開催
→ 各施設・学校ごとのワークショップ実施



子どもたちの交流を目的とした同種の施設の施設間・学校間交流
→ 2施設または2校ごとの交流ワークショップ



新しいネットワーク形成を目的とした、異なる種類の施設間や、施設と学校間交流
→ 施設職員・学校教員・アーティストを交えた交流会議の開催

違いを認め合い、互いを尊重し合うアーティスト・ワークショップの実践と、様々なレベルでの施設・学校間交流を通じて、障害のある子どもたち同士や、関係する大人たちのつながりを生み出し豊かにすることで、将来的には、障害の有無を超え、あるいは文化的な背景や家庭環境の違い、思想信条の違いなどを乗り越えてインクルーシブな共生社会を実現することにつなげたいと考えています。

障害児
入所施設

2施設での
ワークショップ&交流発表会

放課後等
デイサービス

2施設での
ワークショップ&交流発表会

小学校
特別支援学級

各校でのワークショップ&
2校ごと計6校での
交流ワークショップ

交流会議によるネットワーク形成

本プロジェクトに参加した施設職員・学校教員・アーティストが参加。障害児支援や教育についての意見交換を行い、施設、学校の違いを超えたネットワークを形成する。

▼2023-2024年度実施データ

2023-2024年度実施データ ▼

障害児 入所施設

P.3

●宮代学園

アーティスト|城 俊彦(ダンス)
期間|2024年3月～12月(10日間)

●友愛学園児童部

アーティスト|松岡 大(ダンス)
期間|2024年6月～2025年1月(6日間)

交流1日

放課後等 デイサービス

P.5

●広尾てくてく

アーティスト|ピスタチオ(美術)
期間|2024年2月～12月(9日間)

●友愛こどもクラブとこここ

アーティスト|松岡 大(ダンス)
期間|2024年2月～2025年1月(9日間)

交流1日

小学校 特別支援学級

P.7

●業平小学校

アーティスト|青木尚哉(ダンス)
期間|2024年10月～2025年1月(5日間)

●外手小学校

アーティスト|松岡 大(ダンス)
期間|2024年11月～12月(3日間)

交流1日

●赤羽小学校

アーティスト|仁科 幸(ダンス)
期間|2024年9月～12月(6日間)

●浮間小学校

アーティスト|若鍋久美子(音楽)
期間|2024年10月～12月(2日間)

交流1日

●王子第一小学校

アーティスト|長与江里奈(ダンス)
期間|2024年9月～2月(6日間)

●滝野川小学校

アーティスト|浅井信好(ダンス)
期間|2024年11月～2025年2月(3日間)

交流1日

交流会議

2024年12月27日

参加者 |
障害児入所施設職員2名
放課後等デイサービス職員2名
小学校特別支援学級教員2名
アーティスト2名

P.11

Summary 概要

施設名	地域	対象	アーティスト	アシスタント	実施日	交流ワークショップ
宮代学園	渋谷区	小学4年生～ 高校3年生 12名(延べ60名)	城 俊彦 (ダンサー)	杉本音音	3/25, 3/27, 4/17 5/15, 6/12, 7/17 8/6, 8/21, 12/25 12/26	9/15
友愛学園 児童部	青梅市	小学2年生～ 高校3年生 9名(延べ59名)	松岡 大 (舞踏家)	加藤理愛 高嶋袖衣 Wagane Ndiaye Rose	6/8, 7/15, 8/19 11/17, 12/1, 1/26	
合計	2施設	小学2年生～高校3年生21名(延べ119名)			16日	1日

Workshop Report ワークショップ・レポート

宮代学園

子どもたち一人ひとりの好きなことや、やりたいことを見つけるように始まったワークショップ。ジャンケンをきっかけにした動きを考えたり、ティッシュを落とさないようにするにはどうすれば良いかを考えたり、遊びのような感覚で身体を動かすことを楽しむ時間を重ねました。また、衣装や舞台美術にもなる大きな絵を描く回も設けました。いろんな色が混じり合い、その色にも一人ひとりの想いが感じられる素敵な衣装と美術が完成しました。交流ワークショップや、最終回の発表会にはその衣装を着て、舞台美術の前でダンスを披露しました。



友愛学園児童部

2つのグループに分けてワークショップを実施。前半グループは、ダンスや音楽が好きな子を中心に、子どもたちに振付を考えてもらい、子どもたちがリクエストした楽曲でダンスをつくりました。後半グループは、ペアやみんなでつながるなど、身体を使った関わり合いやコミュニケーションを楽しむような時間も取り入れました。最終回には、それぞれが好きな動物を描いた衣装を着て、施設内の他の子どもたちや職員にダンスを披露。お客さんが飛び入りで一緒に踊るコーナーもあり、たくさんの拍手をもらってみんな満足そうな表情をしていました。



交流ワークショップ

オンラインでの交流ワークショップを行いました。友愛学園の子が考えた振付を宮代学園の子に教えて、それをみんなで一緒に踊ったり、宮代学園で行ったティッシュを使ったワークをみんなでやってみたり、それぞれが経験したこと、考えたことを伝え合い、画面を越えて共有する時間になりました。また、宮代学園では、子どもたちがつくった舞台美術や衣装も紹介しました。始まる前は、オンラインでどこまで参加できるか不安もありましたが、感想を伝え合うことやお互いに見ることを、職員やスタッフが予想した以上に自然に楽しむ姿が見られました。



寄稿



友愛学園児童部
施設長

石川 淳

子どもの可能性を育む

友愛学園児童部は、主に知的障害のある18歳までの児童が生活をしている障害児入所施設です。

私たちが芸術家と子どもたちの活動に参加したのが、2016年のことで気付けば10年が経とうとしています。年齢の異なる5名程度の児童でグループを作り、リズムや音楽などで体を動かし、表現することを中心としたワークショップを行ってきました。毎年、児童の入退所があるため、それに伴いワークショップへの参加メンバーも入れ替えながら、これまでに参加した児童は実に53名に及びます。

活動へのお声がけがあり、参加することを決めるときは、単に子どもたちの余暇活動の一環として、楽しい時間が過ごせれば、との考えでした。余暇活動が十分でない現状もあり、その根底の思いは今も変わっていません。

しかし、これだけの期間と人数を継続してきたことには理由となるいくつかのエピソードがあります。

参加する児童の中には、輪に入ることに躊躇し、なかなか活動に参加できない児童もいます。単に恥ずかしいという気持ちだけではなく、障害特性から自ら失敗することが認められないことや、生い立ちの中で愛着が正しく形成されず自己肯定感が低く、自信が持てなくなっている児童もあり、気持ちを持って行くのも単純にはいきません。こうしたことも、アーティストをはじめスタッフの方々は共有してワークショップを展開して関わって下さっています。

アーティストに導かれ、少しずつ体を動かしていると、「それかっこいいね」、「わたしもそれやってみよう！」などの声がいっしょに聞かれ、互いを認め合う言葉や共感し合うといった何とも言えない素敵な時間が生まれます。参加を躊躇していた児童も、はっきりと自信に満ち溢れた表情へと変わる瞬間を幾度も目の当たりにしてきました。児童の自己肯定感が育まれている証拠でもあります。

今年度は、はじめてリモート動画を使用して、他施設の児童とのセッションに取り組みました。知的障害という特性からも、初めて会った画面の向こう側のお友達をどう理解し、画面を共有できるのか不安でしたが、その心配をよそに画面を良く見て相手の動きにも合わせながらダンスを披露し、その順応性の高さに只々、驚かされました。

これまでのワークショップを通して、生活の場では見ることのない姿や潜在能力に気づかされることが多々ありました。児童にとっての楽しいひと時は、いつしか私たち支援者にも大きな意味のある活動となっています。

これからも小さな天才アーティストの活躍を楽しみにしていると共に、児童への新たな可能性の場を提供下さっていることに感謝いたします。

Summary 概要

施設名	地域	対象	アーティスト	アシスタント	実施日	交流ワークショップ
広尾てくてく	渋谷区	小学1年生～ 高校3年生 20名(延べ86名)	ピスタチオ小村 歩 (造形ワークショップデザイナー)	青木静香 金子文	2/27, 3/21, 5/27 6/20, 7/19, 8/21 9/26, 10/21, 12/17	11/25
友愛こども クラブ とことこ	青梅市	小学1年生～ 高校3年生 13名(延べ73名)	松岡 大 (舞踏家)		2/12, 3/8, 4/22 6/10, 7/23, 8/20 9/30, 10/21, 1/20	
合計	2施設	小学1年生～高校3年生33名(延べ159名)			18日	1日

Workshop Report ワークショップ・レポート

広尾てくてく

曜日によって参加するメンバーが入れ替わるので、いくつかの曜日や、夏休み期間にワークショップを設定。毎回1回完結で作品をつくりました。春には桜をモチーフにしてお花紙や画用紙を切って貼って大きな桜の木をつくったり、植木鉢に色を塗って種を撒いたりもしました。共同制作を体験してみたい、という職員の方々の要望もあったので、例えば1人1個のランタンをつくった後に、数人のグループで大きなテントをつくって中にランタンを持って入ってキャンプの雰囲気を味わうなど、誰かと一緒にひとつのものをつくる回も設けました。



友愛こどもクラブとことこ

少し早めに学校から帰ってくる小学生中心のグループと、遅く帰ってくる中高生中心のグループに分けて2部制でワークショップを実施。いくつかの楽曲に合わせて、アーティストの真似をしながら振り付のあるダンスを踊ったり、その中にみんなで手をつないだり誰かとふれあうような動きを取り入れて、一緒に踊る楽しさを味わえるようにしながらワークショップを重ねました。



交流ワークショップ

実際に会ったことのない子どもたち同士、それぞれ美術とダンスという異なるジャンルのワークショップをしていて、しかもオンラインでの交流ということで、どういう形で臨むのが良いか悩みましたが、交流の前に、それぞれの放課後等デイサービスで、「チャフチャス」という鈴をつけた楽器をつくり、それを使ってダンスで交流することにしました。最初に、それぞれがつくったチャフチャスを画面いっぱいに映して紹介し合った後に、チャフチャスを振りながら、友愛こどもクラブとことこのワークショップで踊っていたダンスや、広尾てくてくの子どもたちが好きな楽曲に合わせて楽しく身体を動かしました。みんなチャフチャスを鳴らすのが好きな様子で、画面を見つめながら賑やかに踊り、最後には「楽しかった!」と、画面越しに感想を伝え合う姿が印象的でした。



寄稿

アーティスト

ピスタチオ
小村 歩



造形教室「南京豆」主宰
造形ワークショップデザイナー

放課後等デイサービスは放課後や学校がお休みの日に過ごす場所なので、月1回の造形ワークショップがリラックスした時間になるといいなと考えていました。

私が毎月担当している別のデイサービスでは、基本的には数人ずつの対応で、気分が乗らない子には時間をあけて気分が乗るタイミングと一緒に制作するという形で行っていたので、決められた時間に全員と一緒に活動することでどういう活動になるのか、始まる前は不安と楽しみな気持ちが入り混ざっていました。

同じ活動でも感触を楽しんで「気持ちいい〜」という子もいれば、感触が苦手な子もいます。「またやろう〜!」と声をかけてくる時もあるけれど、「もうおしまい〜!」と終わりがたがる日もあり、まっすぐ素材や環境と向き合いながら素直に表現する子どもたちの振る舞いや作品は、その子らしさが滲み出ていてとても愛おしかったです。と同時に、制作の順序を変えれば良かったとか違う画材が良かったかなど課題も次々に出てきました。

ひとつの作品を作る中に五感をそそる工程をいくつも入れて、どこかの部分が誰かに引っかかって気持ちの良さを感じてもらえたらと考えていましたが、やっていくうちにできなかった作業ができるようになる瞬間にも立ち会えて、出来上がった作品を鑑賞する時に、名前を呼ばれると少し恥ずかしながらも嬉しそうにみんなに作品を見せていたのがとても印象的でした。

「広尾てくてく」の職員さんからはその都度フィードバックをいただき、スタッフも多めに子どもたちがそれぞれ楽しめるように様々な配慮をしていただきました。

11月の「友愛こどもクラブとことこ」との交流会ではまずはスクリーンに映る自分たちにみんな興味津々。同じ時間に同じ楽器を持った子達がスクリーンに映っているということがわかってくるとスクリーンの裏側を見たり、スピーカーを眺めたり。馴染みのある曲でのダンスを思い思いに楽しんでいました。回数を重ねるワークショップでできたことも多かったので、交流会も回数を重ねるとさらに実りあるものになるかもしれませんね!

支援の必要な子の多くはいつもと違う環境に不安を感じる子も多いです。月1回の造形ワークショップが、いつもと違うことにちょっとチャレンジできた、なんだか気持ちよかった、楽しかった、とそんな風にじんわり感じるような活動になっていたら嬉しいです。

Summary 概要

学校名	地域	対象	アーティスト	アシスタント	実施日	交流ワークショップ
業平小学校	墨田区	特別支援学級 2年生～6年生 15名(延べ81名)	青木尚哉 (振付家・ダンサー)	坂田尚也、樋笠理子 宮崎知佳、森田由依	10/11, 12/4, 1/15 1/22, 1/29	12/20
外手小学校	墨田区	特別支援学級 1年生～6年生 12名(延べ41名)	松岡大 (舞踏家)	加藤理愛 高嶋柚衣	11/19, 11/26 11/28	
合計	2校	特別支援学級1年生～6年生27名(延べ122名)		8日	1日	

※業平小学校では、5年生3クラスとの交流ワークショップも実施。

Workshop Report ワークショップ・レポート

業平小学校

ワークショップは骨の話からスタート。骨と骨をつなぐ関節があること、骨折と脱臼はしてはいけないことなどを話して、「マネキンとデザイナー」というワークに取り組みました。デザイナー役が、マネキン役の子の身体を動かす時には、どこまでどのように身体が動くのか、痛くないように相手のことを考えながらデザインしました。大人も交じって相手を交代したり音楽に合わせて、少しずつ変化を加えて取り組みました。



交流ワークショップ

業平小学校がバスで外手小学校へ出かけて交流ワークショップを実施。事前にオンラインで交流する機会を設けてくれたおかげで、子どもたちは実際に会うことを楽しみにしている様子でした。45分間×2コマで、前半は業平小学校で行った「マネキンとデザイナー」のワークをみんなでやってみました。2校の先生たちがマネキンになって子どもたちがデザイナー役をしたり、ペアを代えたりするうちに子どもたち同士の関わりが広がり、中休みにはいつの間にかみんな混じって鬼ごっこをしていました。後半は、外手小学校のつくったダンスを業平小学校の子どもたちに披露して、最後にそのうちの1曲を全員で一緒に踊りました。手をつないで輪になったり、間奏では自由に好きな動物になって踊ったり、ダンスが人と人をつないでくれました。帰りのバスでは「来年またやりたい」「次は外手小学校に業平小学校へ来てもらいたいね」などの感想が聞かれました。



外手小学校

毎日朝の会に好きな曲で踊っているという子どもたち。いくつか曲を決めて、振付で踊ることや、先生の提案でプロジェクターを活用したダンスにも挑戦。それぞれが好きな動きを取り入れた振付もあれば、種から芽が出て花が咲くといったイメージに合わせて、即興的に動きをつくる抽象的な活動も行いました。そして、暗い中で白い体操服に映像を映して動きのイメージを広げるなど、交流する日に見せるダンスをつくっていききました。



Summary 概要

学校名	地域	対象	アーティスト	アシスタント	実施日	交流ワークショップ
赤羽小学校	北区	特別支援学級 1年生～6年生 35名(延べ214名)	仁科幸 (ダンサー・振付家)	王下貴司 斉藤悠	9/18, 11/6, 11/13 11/20, 11/27, 12/4	12/11
浮間小学校	北区	特別支援学級 1年生～6年生 36名(延べ108名)	若鍋久美子 (打楽器奏者)	江藤弘憲、土屋恵 鳴海碧、松浦華子	10/31, 11/13	
合計	2校	特別支援学級1年生～6年生71名(延べ322名)		8日	1日	

Workshop Report ワークショップ・レポート

赤羽小学校

初回は、好きな食べ物の自己紹介をした後、みんながカレーの食材になったつもりで、身体で表現するクッキングをしたり、大きく貼り合わせた薄い紙の上で紙を破らないように動いたり、遊びの中から身体を使って表現することを楽しむ時間をつくりました。2回目以降は、学芸会の劇づくりをダンスでお手伝いしました。先生がつくったオリジナルの冒険物語の中で、身体で表現するシーンや、ダンスのシーンをつくっていききました。



交流ワークショップ

ダンスと音楽という異なるジャンル、そしてオンラインでの交流ということで、事前に学校間でオンラインのテストをし、双方のアーティスト同士で打合せをして内容を検討しました。最初は浮間小学校のセッションを聞いてもらい、そこに赤羽小学校で考えた動きを演奏に合わせて踊ってもらいました。また、途中アーティストによる演奏とダンスを鑑賞する時間を入れて、最後には「水」をテーマにした浮間小学校の即興演奏を聞いて、静かな雰囲気共有しながら、赤羽小学校の子どもたちが青い大きな布の上で自由に踊るとい、即興の音楽とダンスのセッションをしました。賑やかに楽しい場面と、少し静かな雰囲気で見たり聴いたり、画面の向こうに意識を向けながら、オンラインでも楽しい時間をつくることができました。



浮間小学校

低学年と高学年の2グループに分けて、たくさんの楽器にふれるワークショップを行いました。低学年は、太鼓や小さな音の民族楽器など、一人ひとりが好きな音を出してその音色を聞き合う時間を設けました。高学年はドラムが演奏できる子や、トロンボーンに興味を持った子がいて、豪華なセッションが実現しました。子どもたちが好きな曲に乗せて思うままに演奏したり、アーティストが演奏するリズムに自然に子どもたちの音が重なったり、豊かなセッションが生まれました。



Summary 概要

学校名	地域	対象	アーティスト	アシスタント	実施日	交流ワークショップ
王子第一小学校	北区	特別支援学級 1年生～6年生 37名(延べ228名)	長与江里奈 (ダンサー・演出家)	北園 優 鈴木綾香	9/5, 9/12, 10/31 11/14, 11/15, 11/19	2/5
滝野川小学校	北区	特別支援学級 1年生～6年生 19名(延べ70名)	浅井信好 (振付家・ダンサー)	加藤理愛 平田 菜	11/7, 12/19, 1/21	
合計	2校	特別支援学級1年生～6年生56名(延べ298名)			9日	1日

Workshop Report ワークショップ・レポート

王子第一小学校

初回は、アーティストの動きを真似しているような動きを体験したり、ピアノの生演奏で音からイメージして動いたり、ペアになってふれあいを楽しむワークをしたり、身体を使う表現活動を楽しむことから始めました。2回目以降は、音楽会の発表に向けて合奏や合唱だけではなく、身体を使ったパフォーマンスづくりに関わりました。登場する時にペアでアイコンタクトをしてポーズをしたり、演奏する楽曲のテーマに合わせた動きをつくったり、身体を使って音楽を楽しめるように工夫しました。



滝野川小学校

モノを使って身体の動きを引き出していくワークショップ。まずは、数百個の木の積み木で、友だちの人型を取り、そこから崩さないように抜け出したり、みんなでひとつの大きなクジラをつくったり、迷路をつくるなど、どんな遊びができるかを考えて実際にやってみました。そして、迷路ができたなら、その道を普通に歩いてみて、その次は四つん這いで歩いてみるなど、少しずつ身体の動きを使った展開につなげていきました。また、できた迷路の積み木を立体的に変化させると、ひとつの未来の街のように見えました。



交流ワークショップ

滝野川小学校がバスで王子第一小学校へ出かけて交流ワークショップを実施。子どもたちは事前にオンラインで自己紹介等をして当日を迎えました。45分間×2コマで、最初は王子第一小学校のアーティストのパフォーマンスを見せてから、ピアノの生演奏に合わせて身体ほぐし。そして滝野川小学校で取り組んだ、寝転んだ人の形を積み木で型取り、積み木を崩さないように起こすというワークを、滝野川小学校の子どもたちが見本を見せて、2校混合のチームで行いました。後半はより身体を動かすワークへと展開。積み木を手を使わずに持ち上げて、その積み木を誰かと交換するというワークでは、子どもたち同士の関わりが広がりました。最後は、ピアノの音色からイメージを広げて身体を思いっきり動かして終了。帰りには、王子第一小学校の子どもたちが花道をつくって滝野川小学校の子どもたちを賑やかに見送ってくれました。



寄稿

王子第一小学校
特別支援学級担任
主任教諭



酒井 亮

王子第一小学校のワークショップへの参加は、2回目でした。

1回目は、一昨年に学芸会に向けて、劇の演出の仕方について相談し、劇中の歌2曲をつくっていただきました。芸術家の方々が、子どもたちから劇の登場人物のイメージを聞き出し、歌詞とメロディーを付け、振付も子どもたちから出た動きを取り入れ、みんなで楽しく歌って踊れる曲が仕上がりました。年度末には、6年生を送る会で歌の歌詞を、6年生への感謝を伝える言葉に替えて発表することもでき、音楽に親しむ良い経験となりました。

2回目の今回は、音楽会に向けて発表の仕方を相談し、歌と合奏以外の表現する方法を教えてくださいました。ワークショップの中で、音楽に合わせて身体を動かすことや、言葉で伝えなくてもボディータッチで動きをリレーしていくこと等、自由度の高い表現方法を教わりました。普段あまり歌わない子や、身体を動かすことが苦手な子も、音のイメージに合わせて、自由に表現することに一人でも取り組むことができるようになりました。また、自分でイメージを膨らませて表現することが苦手な子も、芸術家の方々に動きを褒めていただいたり、全体の中で取り上げていただいたりする中で、少しずつ自信を持って表現できるようになりました。音楽会では、自席からピアノの音のイメージに合わせて身体を動かしたり止めたりしながら入場し、その後二人組で舞台上に登場して、音楽に合わせてポーズを決めることを取り入れて発表しました。音楽会を見た保護者の方からは、子どもたちがのびのびと表現できたことを褒めていただき、「感動して涙が出ました」「成長を感じました」等の感想が寄せられました。多くの子どもたちが、楽しく表現することを学び、自信を高めることができました。

また、今回のワークショップは、滝野川小学校との交流活動も含まれていました。滝野川小学校で行っていた積み木を使った表現活動と本校で行ったピアノの音に合わせて動きを付ける活動を、両校の子どもたちが一緒に体験しました。初めは、自分の学校の友達と活動することが多い様子でしたが、積み木を並べたり、ピアノの音に合わせて積み木を交換したりする中で、一緒に活動することができる児童が増えました。一緒に活動を共有できたことで、今後の区内の合同行事の際など、子どもたちの交流が深まっていくことに期待しています。

ワークショップでは、普段の授業の中では体験できない貴重な体験をさせていただきました。教師も子どもたちも様々な表現の仕方を学ぶことができたよい機会でした。本当にありがとうございました。

交流会議

本事業では、障害のある子どもたちが生活するさまざまな場所でワークショップを実施し、施設間や子ども同士の交流を図ってきました。そして、参加した施設職員や学校教員、アーティストの皆さんにお集まりいただき、取り組みを振り返るとともに、障害のある子どもたちのこれからつながるような、ワークショップの課題や可能性について考える交流会議を開催しました。一部を抜粋してご紹介します。



全編はWEBコラムで公開しています

実施日時 2024年12月27日(金)
10:00-12:30

実施場所 NPO法人 芸術家と子どもたち事務所

参加者

●障害児入所施設

[宮代学園]
児童発達支援管理責任者
椎名美穂

[友愛学園児童部]
副施設長
永田あかね

●放課後等デイサービス

[広尾てくてく]
管理者兼児童発達支援管理責任者
大塚聡之介

[友愛こどもクラブとことこ]
児童発達支援管理責任者
富田祐子

●小学校特別支援学級

[墨田区立業平小学校]
特別支援学級担任 主任教諭
芹澤裕之

[北区立浮間小学校]
特別支援学級担任 主任教諭
加藤有子

●アーティスト

舞踏家 松岡 大
打楽器奏者 若鍋久美子

進行

●NPO法人 芸術家と子どもたち
代表 堤 康彦、事務局長 中西麻友

交流会議 文字起こし・編集：北沢理美

施設同士の交流

— 今回の事業では、施設同士の交流とネットワークの形成をめざして取り組みを実施してきました。普段は、どのくらい施設同士の面識や交流はあるのでしょうか。

※以下、敬称略・所属略称。

永田(友愛)・椎名(宮代)：職員同士はあまりないです。施設長同士の交流はあるけれど…。

芹澤(業平小)：下校時に子どもを引き渡すとき、放課後等デイサービスのお迎えの方と少しお話しするくらいなので、関わる機会というのはとても少ないです。放課後等デイサービスでどんなことをやっているのか、分からないことが多いです。

それぞれの立場からみた子どもたちや施設の現状、課題

— 皆さんそれぞれの立場で障害のある子どもたちと関わっていて、いろいろな課題があるからこそワークショップをやってみようと思ってくださったのだと思うのですが、現状などを教えてください。

若鍋(打楽器奏者)：ワークショップをやっていると、子どもたちのどこに何の障害があるのかなと思うことの方が多いです。私たちは光の面しか見えていないなと思っていて、きっと大変な部分もたくさんあるのだろうなと思っています。

椎名(宮代)：子どもたちとの関わりの中で感じる課題は、表現方法の引き出しが少ないというところ。話すことのできる子どもでも、どうしてもうまく伝わらないもどかしさから、課題行動と呼ばれるような行動に発展してしまう。そういう行動が表出したときに、本人が一番苦しいと思うのですが、どうしてあげたらいいかなと私自身悩むことがあります。

永田(友愛)：ワークショップを始めたきっかけとしては、余暇のバリエーションが増えることで子どもたちにとって楽しい場になるといいな、という思いでした。また、児童養護施設から移ってくる子もいて、幼少期の愛着形成に課題を抱えている子が非常に多く、周りとは比べてできないことが多い子どももいます。そのような中で、ワークショップでは何をやっても「すごいね」と言ってもらえる、職員や家族とは違う外部の方から自分を認めてもらえることは、子どもたちにとって、とても大きな経験になっています。

芹澤(業平小)：ダンスのワークショップを行ったので運動面の課題をお話すると、日々の指導の中で、子どもたちが自分の身体のイメージをもつということはすごく難しいと実感することが多くあります。また、自己肯定感が低い子どもたちもいて、自分自身の運動能力が低いこと、運動に対してマイナスなイメージを持っている子がいると感じます。否定されることなく、のびのびとやるのが今一番大切なのかなと実感しています。



加藤(浮間小)：私たちの学級は35人ですが、グレーゾーンの子も多くいます。自分を出せない子、情緒的にイライラしてしまう子も実は結構いるのです。でも、ワークショップをやっているうちに自分が活躍できる空間に満足して、自己肯定感が上がってきています。子どもたちを輝かせてくださったことが本当に嬉しいです。

大塚(てくてく)：やはり子どもたちが成長するためには、経験がすごく大事だと考えています。障害のある子どもたちは、経験不足や経験できないことがあるなかで、このようなワークショップは大切だと思っています。また、いま「地域交流」ということが放課後等デイサービスに求められているのですが、当事業所としては職員以外の外部の方と接する機会ということで、地域交流も担ってもらいたいと思っています。

富田(とことこ)：いま、放課後等デイサービスには、「5領域^{*}」を含めた子どもたちへのよりきめ細かい多面的な支援が求められています。例えば、言語や人間関係、運動とか生活、健康、そういうところを網羅した療育を放課後等デイサービスでもやりましょうということになっているのですが、日頃の課題としては、やっぱり「放課後」は短いなと思います。子どもたちは学校で一生懸命頑張ってきた後にやって来て、疲れているのをやってもだめなので、楽しいと思って参加してもらえる、悩みを抱えている子が落ち着ける時間を、行政のガイドラインとすり合わせながらどうつくっていくのが、難しいところです。

※5領域：「①健康・生活」、「②運動・感覚」、「③認知・行動」、「④言語・コミュニケーション」、「⑤人間関係・社会性」

アーティストの気づき、感想

— 皆さんからワークショップのいいところをたくさん挙げていただきましたが、アーティスト側としてはどう思っていたのか、難しかったところなども聞かせてください。

若鍋(打楽器奏者)：通常の学級でワークショップをする、子どもたちから「自由にやる」というのを引っ張り出すのが難しいことがあるのですが、特別支援学級では私が子どもたちに教えてもらっていて「そんな楽器のやり方あったの？」みたいな。子どもたちが面白い音を聞かせてくれて、私にとっても発見がとてもたくさんありました。



好きな楽器を選んで自由に演奏する

松岡(舞踏家)：今回、アーティスト側にもすごく学びになったのではないかなという部分があります。私はいろいろなところでワークショップを行います。他のアーティストがどんなふうに行っているのかわかり

ない。それが何年も続くと、ワークショップにはそもそも正解がないので、うまくいっているのかどうか、分からなくなる。今回の取り組みを通して、他のアーティストがどのようにワークショップをしているのを見ることができたので、とても良かったなと思っています。提案も含めてなんですけれども、例えば新たなアーティストが学校や施設にワークショップに行くときは、その一歩前の段階で、他のアーティストのワークショップを見学するとか、現場に同行させてもらおうと、また違うつくり方ができるのかなと思いました。

中西 (NPO)：今回の施設同士の交流では、Zoom を使ったのオンラインと、どちらかの施設や学校に出向いていく対面の両方がありましたね。

松岡 (舞踏家)：Zoom は意外と可能性があるなと思いました。コロナが流行していたときに、仕方なく Zoom で行うということがありましたけれど。車椅子で外に出られないとか、そういう方ももしかしたらいるかもしれない。今後、積極的に活用していくことができるのかなと思いました。



画面の向こう側へ伝わるようにポーズ

交流ワークショップでの様子

— 今回の取り組みでは、施設同士の交流を取り入れたことが新しいチャレンジでした。交流ワークショップでの気づきや感想を教えてください。

芹澤 (業平小)：やっぱり子どもってすごいなと思うことがありました。私はとても緊張しやすいので、初めてのところに行って、初めての人に話しかけたり、一緒に運動したりとか、不安な気持ちになるけれど、子どもたちはのびのびと過ごしていました。自分たちがやってきた活動を他の子たちに伝えてあげるとか「こうやるんだよ」「一緒にやろう」という声かけが自然に出るなど、いつものクラスの中で関わるのとは別の姿を見ることができて、すごく良かったなと思いました。

加藤 (浮間小)：オンラインで交流しましたが、やっぱり「直接行って、顔を見合わせてやりたかったね」という教員の声は多く聞かれました。同じ場所にいたら、もっと違う交流ができたかなと思うところはありました。

若鍋 (打楽器奏者)：画面越しだと、ワークショップで使う布の質感とかが分かりにくい。黒い人影と、青い帯状のものがはためているな、くらいですね。でも、実際に目の前にあると、布の軽さとか手触りとかが分かるので、そういうものが音にすごく影響する。イメージに直結するので、対面だったら、たぶん子どもたちもずっと入って音が変わっただろうなと思います。また、最初に相手の学校に演奏を演奏してから、演奏に合わせて一緒にダンスをしてみようという流れにしたのですが、発表したことの良さがあっていいと思います。せっかく演奏したものを誰かが聞いてくれるのはめちゃくちゃ大きい。

椎名 (宮代)：今回はオンラインでしたが、今後交流する機会があるのであれば「宮代学園の子たちを友愛学園に連れてくのもいいね」「特別感もあるし、どういふ相乗効果が生まれるのだろうか」という話を他の職員としていました。

中西 (NPO)：音楽だと通信環境による音の問題があり、ダンスは直接のふれあいを大事にするので、オンラインでワークショップを実施することに対してアーティスト側にも抵抗があるのではないかなと思っていました。本当にちゃんとできるのかなと私自身も自問自答しながらの実践でしたが、子どもたちの方がはるかに軽やかに、そういう心配を超えて参加してくれていました。

大塚 (てくてく)：交流をより良くするのであれば、ワークショップで楽器をつくっているときからオンラインでつないで「こちらではこういうのをつくっているよ」とか、お互いの取り組みを知る機会をもう少し増やしても良かったのではないかなという意見がありました。



広尾てくてくの子もたちがつくったチャフチャス

ワークショップへの期待と可能性

— 最後に、これからのワークショップに対する期待や、こういうワークショップをやりたいなど、ありますでしょうか。

富田 (とことこ)：アーティストが来てくれたことによって「ダンスをやりたい」とか「楽器をやりたい」とか、やりたいことが見つかった子は、本当に幸せだと思います。子どもたちは18歳までしか放課後等デイサービ

スに通うことができなくて、親御さんたちから今後の不安をよく聞きます。成人になったときに、青年サークルみたいなものが少しずつできて、「あそこ行って何か教えてもらいなよ」とか「何かできるよ」というふうに言えたらいいなと思っています。

加藤 (浮間小)：本物を子どもたちに味わってもらいたいというも思っています。学校でよくスクールコンサートとか劇団に来てもらうこともありますが、子どもにとって一方的で、1回聞いたら終わりということが多い。でも、このワークショップは、アーティストやスタッフが学校に出向いてくれて「どんな形でワークショップをやりたいか」というところから始まるのが、すごく大きいというか、素敵なおところだなと思っています。

芹澤 (業平小)：加藤先生もおっしゃっていた通り、このワークショップは一方的ではなくて、子どもたちが自分自身の中に持っているものを引き出してくれます。大人が提供したものではなく、自分で「楽しい」を見つかるか、つくり出すことができる。この経験がすごくありがたいなと思っていて、これからも継続して続けていきたいなと思います。

永田 (友愛)：余暇の時間に何をするか決められない子はたくさんいます。ワークショップでは、自分の好きなもの、自分の能力とかが花開く時があるので、そういうものが見つかるか、きっと子ども自身の将来の生活でも強みにはなっていくのだろうと思います。

椎名 (宮代)：ワークショップでのアーティストとの関わりや、子どもたちが自由に表現して、それを受け止めてくれる場というのは、私たち職員にとってもプラスの面をたくさん見ることのできる、すごく大切な時間だなと思っています。

松岡 (舞踏家)：今回、複数のアーティストが関わることで、いろいろな発見がありました。今後、例えば、ひ

とつの施設の中で、複数のアーティストが受け持ちながら何かつくるというのも面白いのかなと思いました。また、この取り組みの「セクション(施設)を超えて、つながりをつくる」というところを、もう少し社会に発信できないのかなと思います。普通の人は、たぶん知らない。それが、障害のある方が隔離されてしまうとか、自分の好きなことに向き合えないということにつながっているのかなと思っていて、もっと知ってもらおうということが、活動の中にあっても良いと思っています。

今後について

— お互いを理解するために大切なこと

中西 (NPO)：事業が始まる前は、私たち自身も大丈夫かなと心配していたのですが、何よりも子どもたちのおかげで、そして皆さんの多大なご協力があり、無事に実施することができました。でも、障害のある子どもたちをめぐる世の中に対して、どうにかしていかなくちゃいけないこととか、私たちができることはまだまだあるなと改めて思ったので、今回の気づきや学びを今後に活かしていきたいです。

堤 (NPO)：いわゆる「健常の子ども」と「障害のある子ども」のつながりというか、お互いが理解し合えるような雰囲気や醸成していかないといいけない。本当の意味でのインクルーシブな社会というのをつくっていくにはどうしたらいいのか、同時に考えていきたいなと思っています。私たちは障害のある子どもたちの良さというか、面白さ、能力、そういうものをすごく感じているんですけど、それが社会になかなか伝わらない。だから、もっとパイプを多くするとか、実際に会える機会を多くするとか、そういうことがきっと必要なのだろうなと改めて思いました。今日は本当にありがとうございました。

みんなで描いた絵を舞台美術にした発表



アンケート集計

ワークショップ終了後に、実施施設・校の職員や教員に対してアンケートを行いました。

回答者数：16人(4施設・6校)

※1施設・校につき、複数の職員・教員からの回答あり。

Q.2

当事業への参加は、子どもたちにとって、どんな影響・効果があったと思われますか。

※自由記述より抜粋

A. 障害児入所施設

○少人数での定期的な活動があることで、保護者、職員、教員とは異なる大人からたくさん褒められ、楽しい笑顔になれる時間を共に過ごす事でワークショップの時間が楽しかったこと、次回を楽しみにしている様子を感じています。一人ひとりにスポットがあたる時間なので、自信がついた児童もいた様子です。

○今回は、初めて他施設との交流もリモートで実現し、子どもたちがどのような反応をするのか予想がつかない部分もありましたが、画面の向こうの存在も気にしつつ活動できていた事に驚きつつ、子どもたちの新たな可能性を感じることができました。

A. 放課後等デイサービス

○ダンスが好きな子がいて、(保護者が)利用日の調整をして全日参加してくれた。前日から芸術家の日を楽しみにしていました、と先生から聞いて学校でもお話をしていることが分かった。

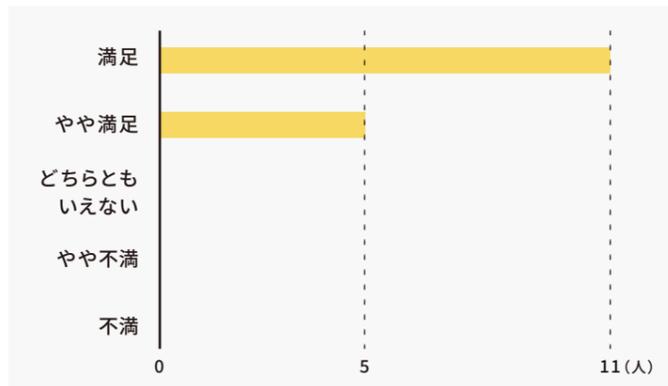
○みんなで取り組むことで、できなかったことに挑戦しようとする姿や集中して取り組むことができていた。活動を楽しみにしている様子もあり、参加することができていた。

A. 特別支援学級

○学級内や校内では関わりが薄い子ども同士が関わることができ、感想も良かった。

○友だちとタッチをしたり、足のマッサージをしたりと普段接触がそれほど多いわけではないので、たくさん関わる事ができて仲が深まり、楽しく活動できたと思います。

Q.1 当事業は職員や先生にとって満足できるものでしたか？



A. 放課後等デイサービス

○決まった動きや、ラジオ体操などの時には見られなかった姿を見ることができた。

○振りやポーズを真似する、ということにこだわらずに、自由に動くこと(歩くことも、這うことも、リズムを身体のどこかが感じて動いていること)がありなると知った。

○制作活動の工程の中で、ひとりのお子さんがこちらの予想では難しいかなと思っていた作業でも、大人の力も借りながらも上手に行っている姿を見られたのが今回のワークショップだから知ることができたと思います。

○子どもたちが自発的に他校の子どもたちと関わろうとするきっかけになっていた。

○5年男児「ぼくは今日、生まれて初めて好きなものが見つかった」とキラキラした目をしながら言ってくれました。全身でコンガを演奏し、こんな表現をする子なのだと思わされた姿を見せてくれました。

○プロのアーティストさんに出会い、一緒に音を楽しむことができ、本物を味わわせていただけたことは、これから先にも残る心の財産だと思います。

Q.3

当事業への参加は、職員や先生方にとって、どんな影響・効果があったと思われますか。

※自由記述より抜粋

A. 特別支援学級

○声の出し方について「大きな声を出す」という指導になりがちだったが、それぞれの個性を活かして表現することを楽しくするように指導できるんだということを学びました。

○形、型のない表現をすることを楽しんでいる児童がどんどん増えていた。大人が難しいかもと決めずにアプローチしていくことで可能性が広がることを改めて感じた。

○表現運動、リズムダンス等で苦手な子でも「やりたい!」「できそう!」と思える活動が知れた。また、ボディイメージをもてない児童が多い学級でもあるため、今後の体育、また活動の参考になった。

○「交流および共同学習」の取り組み方を学べた。人との関わり方を教える方法を具体的に学べた。ダンスのつくり方(身体表現)や表現の幅が広いことを知った。

A. 障害児入所施設

○段階的にワークショップの取り組み(内容)への理解があったり、アーティスト(アシスタント)との関係性が構築されていく過程を目の当たりにすることができ、生活上では見ることのできない児童の潜在能力やものの捉え方等、児童の新たな一面を見ることができました。

今後アーティストとのワークショップに取り組んでみたいと思いますか？

Q.5



Q.4

当事業に対する、ご意見、ご感想、ご希望などがありましたら、お聞かせください。

※自由記述より抜粋

A. 障害児入所施設

○オンラインの交流も良かったですが、今後もこういった機会がありましたら、対面での交流も検討しても良さそうだと感じました。

○児童をはじめ、関わる大人も笑顔が絶えず職員も暖かい気持ちになれる楽しい、貴重な時間でした。

A. 放課後等デイサービス

○興味を向ける範囲がとても限られている子どもたちに対して、自由に身体を動かして自己表現する時間をいただいたことはとても意味のあることだと感じる。少しの時間ではあっても、音楽を聴いて、アーティストさんの動きを見て、「うごかしたい」と思って身体を使った体験がいろいろな場面で「自己表現」のきっかけになっているかもしれない、と感じている。今年度、子どもたちからの言葉やサインの発信が大きく伸びたことに関係しているのではないかと評価している。

A. 特別支援学級

○ワークショップの後に振り返りを行っていただき、児童の様子、やりたいことに寄り添って活動を検討していただいたことがとても良かった。また、今回は通常の学級との交流に加え、特別支援学級同士の関わりの方もあり、とても良い機会でした。次回、小中学校の特別支援学級での交流なども考えられるのかな、と思いました。

○毎回とても楽しく活動させていただきました。最終日に行ったチョキとパーのダンスがとても楽しかったです。もう少し運動をして、身軽にいろんな動きができるようになりたいと思いました。ありがとうございました。

○今回は交流することができ、他校とのつながりも深まり、また他の学校でどんなワークショップをしているのを見ることができ、大変意義深かったと思います。

障害のある子どもたちへの 福祉・教育現場の支援

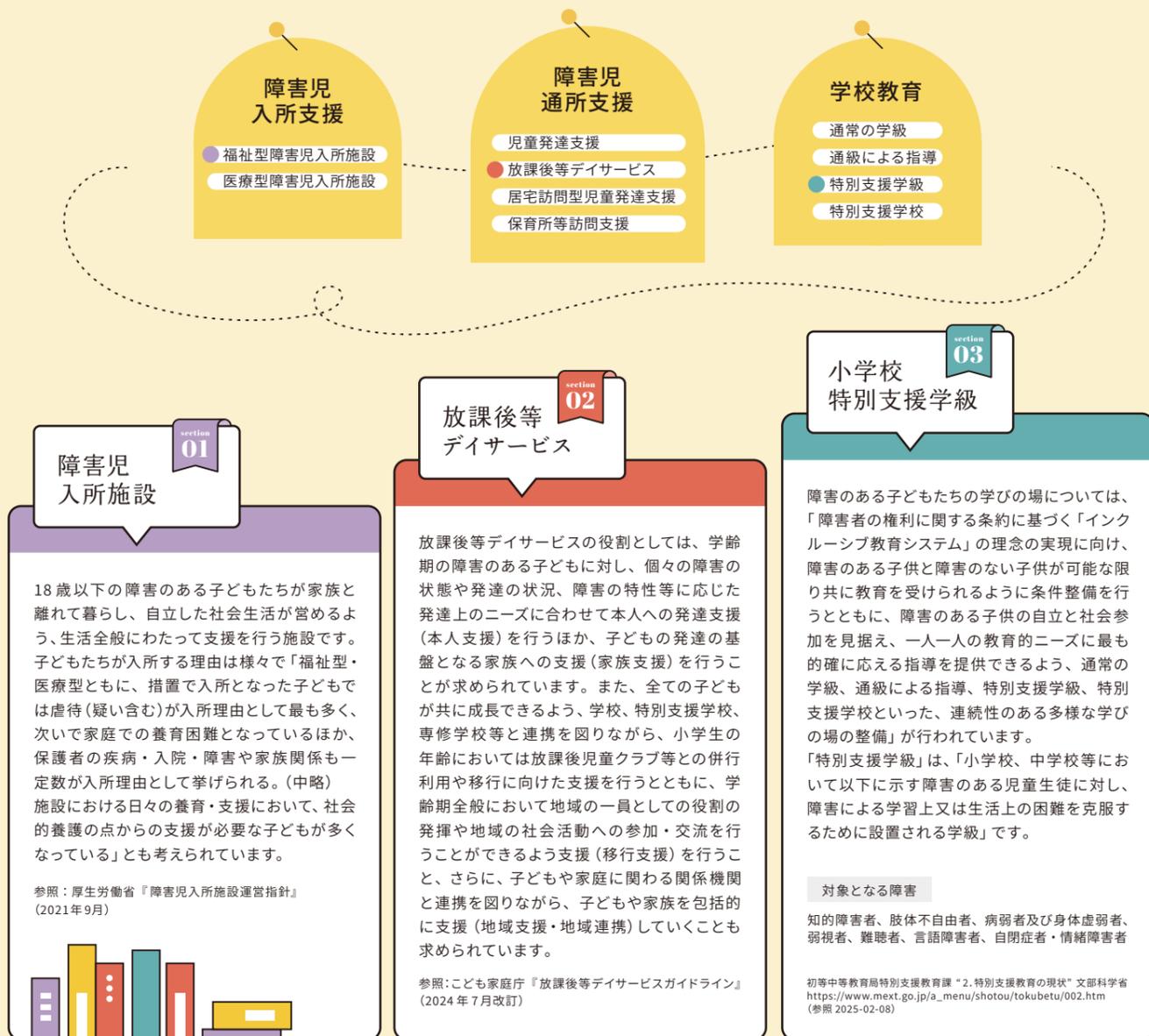
障害のある子どもたちが日々を過ごしている場所や、福祉・教育の支援にはさまざまな場所、形があります。芸術家と子どもたちでは、2003年度以降2023年度までに457校の特別支援学級や特別支援学校でワークショップを実施してきました。2010年度からは児童養護施設でも同様の取り組みを開始。以降、障害児入所施設、児童自立支援施設、児童相談所、ファミリーホームなど、児童福祉に関わる多様な場に活動を広げています。近年では矯正教育の場や、小児病院、地域の子どもの居場所等でも活動を展開しており、そうした場所でも障害のある子どもたちと出会うことがあります。

今回の事業に参加した施設・学校に関係する社会の状況として、福祉現場においては、2012年4月の児童福祉法改正で根拠規定が一本化され、従来の障害種別に分かれていた施設体系が、通所による支援（「障害児通所支援（児童発達支援等）」）と入所による支援（「障害児入所支援（障害児入所施設）」）に一元化されました^{※1}。

学校教育に関しては、2007年にそれまで障害の種類や程度に応じて、盲・聾・養護学校や特殊学級といった、特別な場で手厚い教育を行うことに重点が置かれていた「特殊教育」から、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を行うことに重点を置いた「特別支援教育」へと教育の在り方が変わりました。

そして現在、こども家庭庁の障害児支援施策としては、「障害児の健やかな育成を支援するため、障害児及びその家族に対し、障害の疑いがある段階から身近な地域で支援できるよう地域支援体制の構築を図るとともに、地域の保健、医療、障害福祉、教育、就労支援等の関係機関が連携し、切れ目のない一貫した支援を提供する体制の構築に取り組んでいきます。^{※2}」とあり、行政分野を超えた連携が不可欠だと考えられています。

※1：障害者施策推進部施設サービス支援課「障害児施設」東京都福祉局 <https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/shougai/shougai/shisetsu>（参照 2025-02-08）
 ※2：こども家庭庁「障害児支援」<https://www.cfa.go.jp/policies/shougaijishien>（参照 2025-02-09）
 下図は、※1※2と、こども家庭庁支援局障害児支援課 こども家庭審議会障害児支援部会第6回（2024.7.10）資料2『障害児支援施策について』を元に、本事業に関わりのある施設等を考慮して作成。



これから

この事業を始める前は、どうやって「交流」をつくるのか、どんな効果があるのだろうかというスタートでした。しかし、施設の職員や学校の先生、アーティストの皆さんが、思いの外この提案に賛同して協力してくださり、こちらが「難しいのでは？」と思うことも一緒に挑戦してくださったこと、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

芸術家と子どもたちが、障害のある子どもたちとワークショップをするようになって20年ほどが経ちました。学校の特別支援学級だけではなく、児童養護施設、障害児入所施設、少年院などワークショップに出かけて行く先に「障害のある」と言われる子どもたちがいて、学校の通常の学級の中でも「気になる子」と言われる子どもたちに出会ってきました。

初めて特別支援学級のワークショップを経験したアーティストに、終わった後に「なぜあの子どもたちはこの学級にいるのですか」と質問されることがあります。アーティスト・ワークショップの場で、彼らは表現することが「できる」し、繊細な感覚で周りの様々なことを感じて応えていて、アーティストには「特別な支援」が必要な子どもには見えないのでしょうか。その度に、私の中では「障害がある・ない」という境界がゆらぎ、私たちは「障害ってなんだろう」と自問自答を繰り返しながらワークショップを続けています。

昨今は、障害のある子どもたちが、様々な場とつながり、多様な支援を受けながら地域で暮らせるようにと施策が講じられています。しかし、実際に子どもたちと関わっている体感としては、そのつながりが見えづらいと感じていました。そこで、今回の企画では、アートを介して、子どもたち同士の交流や、子どもたちを取り巻く大人たちのつながりを生み出すことが、誰もが共に生きる社会の実現につながるのではないかと考えたのです。

実際に交流してみると、子どもたちは他校や他施設の子どもたちを認めて、期待感を持って参加していたように感じます。自分たちの演奏を聞いてもらったり、自分たちが考えたダンスを

伝えて一緒に踊ったり、知らない他者に対して臆る子がいるはずなのに、いつの間にかみんなで鬼ごっこをしたりしていました。

彼らの日常の中の、ほんの少しの時間を共に過ごただけで友だちになれるか、ということそんなことはなく、何か強固なつながりが生まれたのか、と問われればそうではないのでしょうか。でも、新しい場所に出かけて、新しいコトや人に出会うことの楽しさや、自分が表現していることを誰かと共有したいと願うことは、誰しもが持っている生きる喜びのようなことなのかもしれません。

また、今回は子どもたちだけではなく、障害のある子どもたちに関わる大人の交流の場を設けました。大人だって知らないことがあるし、一人では抱えきれなくて助けが必要なことだってあります。それぞれの場で一生懸命で、余裕がないとつくれる時間やゆとりを、アートを口実にして、成果を気にしない形でつくれたら、お互いの実践や頑張っていることをもっと知り合うことができ、大人同士の連携から子どもたちへ還元されていくこともあるように思います。

いつもの場所から少しはみ出して、知らない場所へ出かけて知らない誰かと出会ってみること。ダンスや音楽、美術といったアートがある時間の中で、その誰かと共に過ごすこと。たまたま隣にいた「あなた」と「楽しいね」と笑い合うこと。短い時間の、すれ違い程度のささやかな出会いだとしても、その積み重ねが、他者と共に生きる豊かさになるのではないかと今回出会った子どもたちや大人たちの姿を思い返しながらかけています。

どんな場であれどんな他者とであれ、ドキドキとワクワクを素直に抱きながら、大人の心配を軽やかに超えて、その時その場をそこに居る人々と共に楽しんでいた子どもたち。彼らと共にした場の在り方は、人と人が、友だちでも家族でもなく結局は分かり合えない他人同士だとしても、互いに争いも排除もしないで安心して同じ時を生きられる、これからの社会の在り方への手がかりになるのではないのでしょうか。

NPO法人
芸術家と子どもたち
事務局長
中西麻友

